

母と妹への手紙

岩佐幹三

母さん、好っちゃん（好子）。今年も八月六日がやって来たね。

被爆から六十三年がたった今でも、僕は、原爆で連れ去られた母さんたちの命を甦らせて、手を取り抱き合いたいという空しい願いを持ち続けているんだ。

母さん。僕は、先日も何回目かのつらい夢を見たよ。頭上でグワンという爆発音がして破壊し尽くされた街並みが現れた。それを見た僕は、「今度こそは母さんを助けるぞ」と叫んだ瞬間に、目がさめた。その時の悔しさは、言いようがなかったよ。母さんたちの死は、戦争だから仕方がなかったという考え方は、絶対に許せない。

でもね当時の僕は、十六歳の中学生、全くの軍国少年だった。あの年の五月病気で亡くなった父さんや母さんを。本当に困らせたんだらうね。日本が起こした十五年戦争で、アジア諸国で二千万人、日本でも三百万人の尊い命が失われた。その戦争のお先棒を担いだ一人だったんだからね。僕たち若者が、敵の軍艦や戦車に体当たりして戦死すれば、家族は守れるし、後はどうにかなるだろうと浅はかにも死ぬことだけ考えていたんだ。

それなのに死んでも家族を守るべきはずの僕が生き残り、守られるべき二人を守ることができなかった。戦争って何だったんだらう。軍国少年って一体何だったんだらう。

その反省と謝罪の気持ちをこめて、今この手紙を書いているよ。

十五年にわたる戦争、特に敗戦の年は、僕たちの生活は耐乏状態の限界をこえていた。戦争に勝つためにがまんせよと、すべて軍事優先、衣服も食料も配給制度になり、それも遅配続きだった。お金があっても何も買えなかった。本当につらかったね。父さんがいないわが家では、食料の算段もできず、八月はじめには米ビツも空っぽだった。母さんは、「少しでも食べて死ねば顔色でもいいよ」と言って、わずかに残っていたお米を炊いて茶わんに半分ずつ三人で食べたよね。あれが水盃になったのかな。母さん覚えている？

だが母さんは、八月四日か前日の五日か、近所の小さな店で、醤油いためのひじき一皿分を、僕たち兄妹のために持ち帰ってくれたんだ。自分も空腹なのに、一緒に出された大豆の豆かすをひいたコーヒー（？）汁を飲んだだけで、それを僕たち兄妹は、むさぼるように食べてしまったが、親なればこそ、決して忘れてはいないよ。

母さんは、そんなことまでして僕たちを守ってくれたのに、僕は、何もできなかった。だから今になって戦争がもう少し早く終わっていたら、せめて少しでも銀シャリ（白米）を食べさせて上げられたのになんて、時々ごたくを並べているんだよ。でもね、母さんたちの死は決して無駄にはしない。戦争も、原爆＝核兵器ない世界のため頑張っているよ。

あの年、昭和二十年、東京、大阪、名古屋をはじめ全国の大中小都市が次々と米軍機によって焼土となり、沖縄も陥落していた。日本の戦争する余力は尽きていた。それでも国は戦争を継続し続けていた。そして八月六日がやってきた。

あの日は、動員中の工場が電休日だった。八時十五分少し前、僕は、自宅（広島市富士見町＝爆心から一・二キロ）の庭にいた。飛行機の爆音が聞こえて間もなく、激しい爆風の衝撃で、地面にたたきつけられた。そこはやわらかい畑地だったから大した傷も負わなかった。五十センチほど右にいたら庭石にたたきつけられて即死だったらう。家の前のバス通りをはさんだ向かいの家の屋根の陰になって、奇跡的にやけども負わなかった。

一瞬にして崩壊した広島町の町並み。母さんは、崩れ落ちた家の下敷きになっていた。「母さん！」と呼ぶと、屋根の下から「ここよ」という声が聞こえた。「ああ良かった。生きていてくれたんだ」とその瞬間は安堵の胸をなでおろしたんだ。しかしその喜びも束の間だった。屋根板をはがして逆立ちをするように顔を突っ込んだ目の前には、家のコンクリートの土台の上に大きな梁が重なって、行く手をはばんでいた。わずかな隙間から一メートルほど先に仰向けに倒れている母さんの姿が見えた。つむった目のあたりから血が流れていた。どこかをひどくうちつけたのか、何を話しても目を開けず、顔をこちらに向けようとしなかった。「こっちからはもう入れんのよ。そっちで動けんの」と聞くと、「左の肩の上を押さえている物をどけてくれんと動けんのよ」という答えが返ってきた。

別の方から堀り出したが、仲々進まない。そのうちに爆風の吹き返しの火事嵐が物凄い勢いで迫ってきた。火の粉がふりかかってくる。気が気でない。「母さん、駄目だよ。火事の火が近づいてきたよ。こっちからはもう側まで行けんよ。」悲鳴に近い叫び声をあげた。外にいる僕でさえ何が起こったかわからないのだ。まして家の下敷きになって周りが見えない真っ暗な中では不安というよりも恐怖心で一杯だったろうね。でも母さんは、「そんなら早よう逃げんさい」と言ってくれた。

それなのに気も動転していた僕は、「母さん。ごめんね。父さんの所へ先に行っていてね。僕も、アメリカの軍艦に体当たりして、後から行くからね。」何という不遜な親不孝の言葉だろう。しかもその後「好ちゃんが大きくなったら、いい所へお嫁にやるからね」と言ったんだよね。すぐ後から行くと言いながら、妹が大きくなるまで生きると言ったんだ。死別の際に母さんを裏切る言葉を告げたんだよ。そして八十歳近くまで生き延びているんだよ。母さんへの罪の意識は一生だいていくよ。

母さんは、死を覚悟したのか「般若心経」を唱えだしたね。僕は、その声に後ろ髪を引かれながら、原爆の業火で生きながら焼き殺される母さんを見殺しにして逃げたんだ。二～三日後家の焼けあとに積もった灰の中を探したら、母さんが倒れていた場所から遺体らしいものを見つけ出すことができた。それが母さんだったんだ。でもそれは人間の姿ではなかったよ。母さんは、小柄な女性だった。まるでこどものマネキン人形にコールトールを塗って焼いたような油でずるずるした物体だった。母さんは、あんな姿で殺されたんだね。人間としてではなく、「モノ」として殺されたんだ。悔しい。本当に悔しい。

あの日比治山橋近くの土手で野宿した僕は、翌日紙屋町から半ば破壊された相生橋まで来て、突然絶望感におそわれた。それまで被害は広島東部地区だけだと思っていた。橋の上から見渡せる西部地区も同じように原爆焼け野原になっていた。好っちゃん（好子）は、あの年あこがれの県立第一女学校に入学できて、張り切っていたね。でもあの日は、土橋付近の建物疎開の後片づけに動員されていたんだ。相生橋から見ると、すぐ目の前じゃない。「あっ！好っちゃんもやられたんだ。」そう思うと頭の中が真っ白になった。避難先にしていた安佐郡緑井のかおる叔母さん（母の妹）の家にも、あんたは来ていなかった。好ちゃんたちまだ十二～三歳の男女中学生約五千人が、青春の喜びも悲しみも知ることなく死んでいったんだ。戦争が招いた原爆地獄の悲劇は決して繰り返してはならない。

その日からもう生きているはずのない好ちゃんを探す兄ちゃんの放浪の旅が始まったんだ。土橋、己斐、江波、草津、五日市までどこをどう歩いたか全く覚えていない。毎日とは言わないが、ただ夢遊病者のように歩き回ったんだ。あれは、もしかして原爆被害特有

の「ぶらぶら病」の一種の症状だったのかも知れないね。

そしてちょうど被爆から一カ月たった九月六日、急性症状が出て病床に伏すことになった。かおる叔母さんのおかげでたまたま近所に疎開していたお医者さんから高額な注射治療を受けられて、また奇跡的にも回復できたんだ。そのことが契機になって、僕も被爆者なんだと自覚するようになったんだ。

その後かおる叔母さんが、母さんの代わりに僕を養育してくれたんだ。そのおかげで大学を卒業でき、大学の先生になれた。そして勤務地の金沢で石川県原爆被災者友の会の会長に選出されて、被爆者運動にかかわるようになったんだよ。定年になって千葉県に移り住んで、今は被爆者の全国組織である日本原水爆被害者団体協議会の事務局次長を勤めることになった。その間にも多くの被爆者と同じように原爆被爆の影響で晩発性放射線障害のがんや原爆白内障にもかかった。中でも前立腺がんは、薬物療法による治療を受けて、体内にがん細胞をかかえたまま、運動に努めているよ。母さんたちのことは、ちゃんと胸の中に叩き込んで証言活動しているよ。繰り返すことは、決して許されないことだから。

でも僕たちが体験したことよりも、原爆は、もっともっとひどくつらい体験を被爆者に与え続けているんだ。そのような被害を、僕たちの子孫、そして日本国民、さらに人類の上に、再び繰り返させたくない。だから「ふたたび被爆者をつくるな」と核兵器の廃絶を訴え、国が、その「証」として戦争被害、原爆被害に対して将来にわたって補償することを求めて頑張っているんだよ。二〇二〇年には核兵器を完全に廃棄させようという運動が進められている。その目標が達成されたなら、その時には、母さんたちと一緒に空に上ってお星さまになりたいね。

生きるために

岩佐幹三 日本原水爆被害者団体協議会事務局次長



戦争とはなんでしょう。

二〇世紀の戦争は、軍隊だけの戦闘行為ではなく、国民をまきこんだ総力戦になりました。

日本政府がひきおこした一五年戦争は、アジア諸国の二〇〇〇万人をこえる人びとの命をうばいました。同時に日本国民三〇〇万人の命をうばい、その生活もめちゃくちゃにしました。戦争をつづけるために、着るものや食べるものを統制して配給制度にしました。庶民は、お金があっても買えないのです。

軍国少年だったばかりには、戦争は、耐乏生活と自爆攻撃（特攻）による戦闘死を覚悟するという屈折した愛国心、そして原爆被害の体験の記憶として鮮明にのこっています。

わが家は、一九四五（昭和二〇）年の五月、父が病気で亡くなり、母と妹の三人暮らしでした。食料を調達するつてもなく、八月初旬には米びつはからっぽ。空き腹をかかえたまま、運命の八月六日を迎えました。

午前八時一五分、アメリカ軍機が投下した原子爆弾は、爆風、熱線、放射線の巨大な破壊エネルギーで、広島を瞬にして死の街に変えました。

一六歳のぼくは、動員されていた工場が休みだったので、爆心から一・二キロの富士見町の自宅の庭で被爆しました。爆風で吹き飛ばされましたが、奇跡的にケガも火傷も負いませんでした。向かいの家の陰にいて熱線を直接あびず、吹き飛ばされ叩きつけられたのが半坪ほどの畑だったからだと思います。五〇センチほど右にあった庭石に叩きつけられていたら即死だったでしょう。

母と妹

食べものがない時代でした。当時、一〇銭ほどで、大豆の豆かすで作った「コーヒ」にひじきをつけあわせて売っていました。母は何とかぼくたち兄妹に食べさせようと、自分は「コーヒ」を飲んで、ひじきをもちかえり、ぼくたちに

ご飯がわりに食べさせてくれました。

母は、倒壊した家の下敷きになって、生きながらに焼き殺されました。火事嵐があまりにも強烈で助けだせず、ぼくは見殺しにして逃げました。数日後、掘りだした母の遺体は、マネキン人形にコールドールを塗って焼いたような物体でした。母、清子は、四六歳でした。母は、人間としてではなく「モノ」として殺されました。広島、長崎での被爆者の死は、皆このような「人間としての死」といえるものではなかったのです。

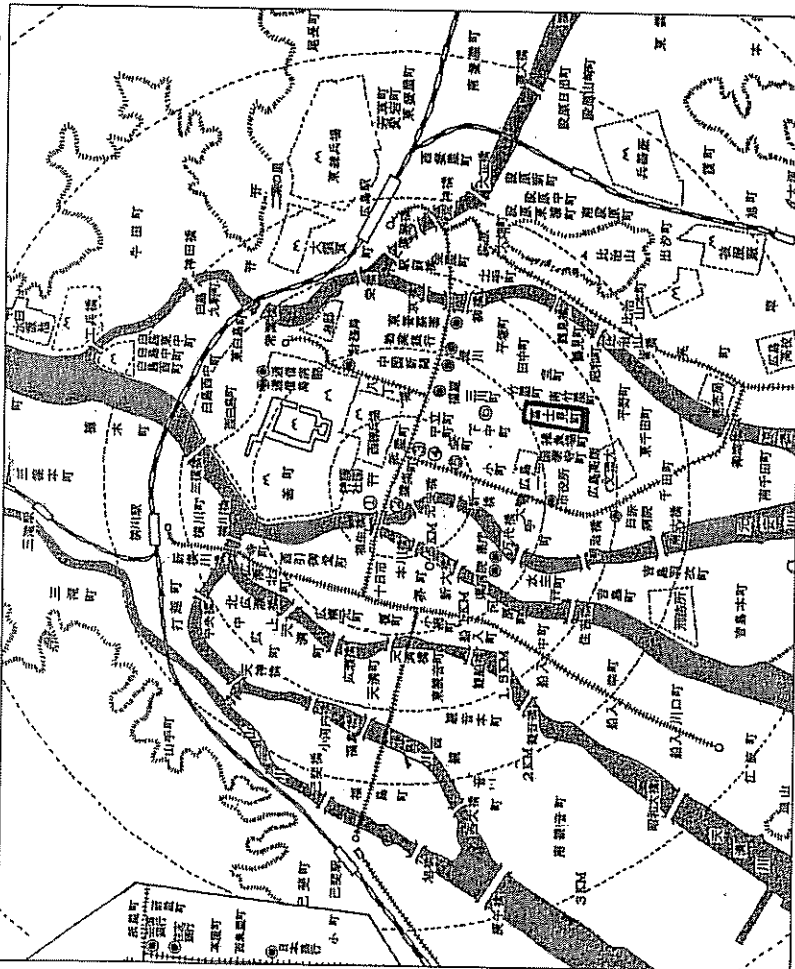
妹の好子は、一二歳、広島県立第一女学校一年生でした。走るのが速く、リレーのアンカーになると、一〇メートルほど離れていても追い抜きました。親はかならず兄ばかりですが、生きていればオリンピックに出られたのではと思います。好子は、爆心近くの建物の疎開の後片づけに動員されているときに被爆しました。即死をまぬかれた少数の先生や友人と逃げたらしく、どこで死んだのか、行方不明のままです。

戦争責任

五〇〇〇人もの、まだ一二・三歳の男女中学生が、青春の喜びも悲しみもなく死んでいきました。非戦闘員だった母たち、妹たちの命を奪いさった侵略戦争を開始し、そして原爆という残酷非道な兵器を使用した日米両国政府の戦争責任は、けつして許せません。

もう二週間はやく、日本に無条件降伏を求めたポツダム宣言が発表された七月二六日にただちに降伏し、戦争を終結させていたら、「ギンシャリ（白米）」のご飯を食べさせてやれたのにと、今でも心の中は怒りと悔しさが渦まいて、母と妹に謝る気持ちでいっぱいです。

孤児になったぼくは、郊外に住んでいた叔母（母の妹）に助けられました。叔父は原爆でなくなっていました。一か月後に急性症状が発症して、生死の境をさまよいましたが、叔母が必死になって探してくれた医者の高額な特別治療で回復でき



右佐さんが被爆され、お母さんがなくなったのは地図の富士見町です。円の中心が爆心。

ました。

ぼくは幸運にして助かりました。しかし、アメリカ占領軍と日本政府は原爆被害の実態を隠しつづけ、被爆者を救援せず放置しつづけました。そのため、一九四五年の年末までに、広島と長崎あわせて二二万人の被爆者がなくなりました。

日本政府は、その後も戦争、原爆被害への補償をまったく実施していません。それどころか、いまも原爆被害を過小評価しつづけ、被爆者に被害を受忍させる（がまんさせる）政策をとりつづけています。

被爆者は、これまで国の受忍政策を転換させて、「ふたたび被爆者をつくらせぬ」ために、核兵器の廃絶と原爆被害にたいする国家補償をもとめて運動をすすめ、援護施策を充実・前進させてきました。

被爆後六二年たった今も、被爆者は被爆の影響による晩発性放射線障害で、白血病やがんをはじめとする病気や障害にかかって亡くなり、病床に

伏し、苦しんでいます。これにたいして、国・厚生労働省は、きびしい基準によって被爆者の病気や障害を被爆の影響による原爆症となかなか認めようともしませんでした。被爆者は、いま全国で原爆症認定集団訴訟にとりくみ、七地裁、二高裁で勝訴して、認定施策面での前進を勝ちとっています。しかし、それでも国は依然として原爆被害の過小評価を改めようとはしていません。

原爆被害を過小評価することは、原爆＝核兵器がまた使われてもたいしたことがないのだ、という核兵器容認の姿勢につながります。

ヒロシマの日、ナガサキの日

ぼくも、人生の四分の二以上を被爆者として生きて、その間、さまざまな病気にかかりました。

そして、ついに一九九六（平成八）年以降、晩発性放射線障害といえる皮膚がんが二度、前立腺がん、原爆白内障が次つぎと発症しました。

前立腺がんは、薬物療法で体内にがんをのこし

ヒロシマを生きる

て、被爆者運動に関わっています。今さら病気や歳に負けてはおれません。

戦争は、人生を一変させる狂気のできごとです。核兵器は人類を破滅に導きます。

今年も八月六日、九日がやってきます。

読者の皆さんの中には、平和行進や原水爆禁止世界大会に参加されている方、また原爆症認定集団訴訟を支援されている方も少なくないと思います。今回は参加できなかった方も含めて、未来を決定するのは、国ではなく、平和を愛するぼくたちです。

今なお地球上にある二万六〇〇〇発の人類抹殺兵器、核兵器を一刻も早く廃絶させて、「ふたたび被爆者をつくることのない」「核兵器も戦争もない未来」を築くために、ともに手をたずさえて歩きつづけましょう。ぼくたち被爆者も生きている限りたたかいつづけます。

● 2万6000発もある核兵器

今なお、世界には2万6000発の核兵器があり、2万4000発がアメリカとロシアのもの。米プッシュ政権の核政策の特徴は、①核兵器を使用することと②先制攻撃することです。

昨年、国連総会は、核兵器をもつ国に、核ミサイルの「即時発射態勢」を解くよう求める決議を採択しました。あまりにも危険だからです。

● 核兵器のない世界を求めて

世界の人口とは、「核兵器のない世界」をつくる大きな運動を作り、国際的な合意をひろげています。2000年5月、アメリカ・ロシア・イギリス・フランス・中国の核保有国が、自国の核兵器の完全廃絶を約束し、190か国が参加する会議（NPT再検討会議）が、その約束に合意しました。

● おかしいぞ！ 日本政府は

被爆国日本の政府はたいへんおかしいです。たとえば、03年8月、日本政府はプッシュ政権に「たとえ北朝鮮が核を放棄しても、アメリカは先制核攻撃のカードを握るな」と提言しています。

● 日本の原水爆禁止運動のチカラ

日本の原水爆運動は、1954年、草の根の署名運動からはじまりました。基本目標は①核戦争阻止、②核兵器全面禁止、③被爆者援護の三つです。核兵器が平和を維持するという考え方が広がった時代にも、核兵器廃絶を訴えつづけ、今日の国際世論をつくり上げてきました。八月の原水爆禁止世界大会は、草の根の運動、NGO、政府代表がつづい、核兵器の廃絶に向けた連帯と共同を大きく広げるものです。

参考 「核兵器のない世界」原水爆禁止日本協議会発行 頒価300円